



Title	田中康雄2009 『支援から共生への道』（慶應義塾大学出版会）をめぐる対話の試み
Author(s)	宮盛, 邦友; 田中, 康雄
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 110, 115-136
Issue Date	2010-06-25
DOI	10.14943/b.edu.110.115
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/43272
Type	bulletin (article)
File Information	07-Miyamori.pdf



[Instructions for use](#)

田中康雄 2009 『支援から共生への道』（慶應義塾大学出版会） をめぐる対話の試み

宮盛邦友*・田中康雄**

The Trial of the Dialog Involving *Ways from Support to Living Together*

Kunitomo MIYAMORI and Yasuo TANAKA

【要旨】

本論文は、田中康雄2009『支援から共生への道—発達障害の臨床から日常の連携へ』（慶應義塾大学出版会）をめぐる、教育学を専門とする宮盛邦友の読後感と、それへの精神医学を専門とする田中康雄の応答によって構成されている、「対話の試み」という共同研究である。「子どもの生存・成長・学習を支える新しい社会的共同」のために、教育学と精神医学の対話は可能か、ということを探求するものである。

【目次】

- I. 教育学と精神医学との架橋—子どもの権利の観点から— [宮盛邦友]
- II. 僕が語ろうとした事柄、気がつかなかった事柄—「語るあなた」へ「語り返す僕」— [田中康雄]

【キーワード】

教育学, 精神医学, 聴く, 連携, 共に生きる

* 北海道大学大学院教育学研究院教育社会発展論分野 助教

** 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授

I. 教育学と精神医学との架橋 —— 子どもの権利の観点から ——

宮 盛 邦 友

はじめに—「あなた」から「僕」へ

「どこにでもある風景，どことなく重なるエピソードは，日常生活を送るなかで，僕たちの共通の世界の存在を証明してくれるものです。その一方で，読み手がほんのちよっただけ，僕と異なる思いを抱くとしたら，日常のなかでの個人というかけがえのない存在感がそこにあるからでしょう。それぞれの物語は，読むだけではなく，自らに振り返ったときに，生き返るものです。僕の僕だけの物語が，あなたの物語につながることもあるとしたら，望外の喜びです。」 [田中Y2009：xii]

「この本もここで『おわり』になります。なにかの縁で読んでくださった方，本当にありがとうございます。多分，僕はその時々で『あなた』と対話していたはずです。さて，本書が終わっても，僕の『臨床』は終わりません。まだまだ『あなた』と会い続けていきたいと思います。じゃ，また！」 [田中Y2009：224]

これは，児童精神科医である田中康雄先生の著書『支援から共生への道—発達障害の臨床から日常の連携へ』（以下，著書）の最初と最後の部分からの引用である。なぜ田中先生の著書を読もうと思ったのか，というと，タイトルに「共生」の文字を見つけて興味をもったから，とか，いろいろと理屈をつけることはできるが，本当のところは，直感的に読まなければいけないと思ったから，である。田中先生の著書をじっくりと読み終えた時，なぜか，「あなた」というのは私自身であり，「あなた」である私が，「僕」である田中先生に呼びかけられているように感じた。本来であれば，個人的な手紙に感想を書いて，田中先生にお渡しすればよかったのかもしれないが，教育学を専門とする私が田中先生の著書を読んで非常に重要だと思ったことを多くの人たちにも伝えたい，という欲張ったことも考えてしまったので，思い切って，公の場で，「『あなた』から『僕』へ」，感じたことを言ってみよう，ということにした。

田中先生の著書は，『教育と医学』という雑誌に2006年7月号から2008年6月号にかけての2年間24回にわたって連載されたもので，「これまでの臨床や日常を振り返りながら，僕が感じ，考えてきたことを，ある程度正直に書き続ける」 [田中Y2009：x] ことをしたものである。

田中先生の著書をつらぬく思想は，一言でいうと，「聴く」ということと「連携」ということになるのではないかと，思う。この二つの思想は，田中先生が，精神医学（厳密にいうと，児童精神医学である [田中Y2007]）の観点から，「子ども発達臨床」に関わる中で生み出したものである。この二つの思想の重要性については，教育学が専門である私も共感するのだが，教育学を専門とする私が共感するということは，「聴く」ということと「連携」ということは，教育学と精神医学を架橋するものなのではないかと，感じた。ここでいう架橋とは，「他領域との架橋で大事なことは，単にそれぞれをつなぎ合わせるのではなく，変貌していく社会が影響を与える学校と家族と子ども・青年の疎外の実態と発達上の問題点に対応した実践的・包括的な検討をしながら，必要な視点と内容を創出していくことであろう」 [横

湯 2002：4] ということである。

もし、教育学と精神医学の架橋ができるとするならば、重要な観点となるのは、「子どもの権利」ではないだろうか。なぜならば、子どもの権利は、子ども存在を総体としてとらえなければならない概念だからであり、同時に、そもそも学際的研究によってしか明らかにすることができない概念だからである。このような子どもの権利のとらえ方は、私の教育学研究の成果であるが、むしろ、私が、子どもの権利条約に関する国連・子どもの権利委員会への報告書づくりをおこなっている、「子どもの権利条約 市民・NGO報告書をつくる会」という人間発達相互援助運動に関わる中で実感した、アクチュアルな体験に根ざして生み出されたものである。[宮盛 2007]

教育学と精神医学を、「聴く」ということと「連携」ということでもって架橋する、このことについて、教育学を専門とする私が、子どもの権利の観点から考えたことを書いてみたいと思う。

1. 「聴く」ということ

田中先生の著書の目次を眺めていて目にとまったのが、「聴き続けることから生まれる希望」という章である。この「聴き続けることから生まれる希望」ということ、それは、ある日常の出来事から田中先生がそう呼びたいと思ったことである。

その日常の出来事とは、次のようなことである。

「先日、友人から紹介された方が相談に見えました。これまでも、いろいろと相談機関を訪れているが、わが子の育ちについて、今ひとつ納得できないという方でした。話を聴きながら、この方のご苦労と努力に正直、頭が下がる思いでした。僕はお母様がおやりになってきたこれまでのことを大切にしたいうえで、これからのことを相談しながら一緒に考えていきましょう、と伝えました。その後『“本当にお会いできてよかった。今後少し光がさしてきたように思えます”というお礼のメールがあったよ』と、紹介した友人がそのメールを転送してくれました。僕ができたことは、大変なことを、“大変でしたね”と正直に伝え返すことで、これまでのご苦労をねぎらうことでした。」 [田中 Y 2009：103]

そもそも、「聴く」という行為は、「聴きとられる側」と「聴く側」から成り立つものであるが、田中先生は、このような単純な二分法をとっていない。田中先生は、「僕にとって、それは聴く側の半身であり、もう半身で希望の光と一緒に探し当てる必要があるのではないかと確信しています。しかもそのためには、まず僕が希望を失っていない、ということが必須条件なのです」 [田中 Y 2009：104] と言って、「聴きとられる側」と「聴く側」が主体的な「相互理解」をおこなう関係を、「聴く」ということとして定義づけしているのである。これは、田中先生の、「医学という『学問』と『臨床』という現状を如何に生き続けるか」 [田中 Y 2009：157] という深く、そして、解決することのない悩みの中から生まれたものであることを考えると、言葉以上のものとして受けとめなければならないと感じる。

その上で、さらに、「聴く」ということを、「聴きとられる側」・「聴く側」・「相互理解」から考えてみたいと思う。

(1) 「聴きとられる側」について

田中先生は、ある具体的な日常の出来事を通して、次のように語っている。

「子どもたちは、それぞれの状況で、きちんと大人たちに向き合い、自分の力を精いっぱいぶつける瞬間があります。撤退していた社会や学校、向き合いにくかった友達や大人たちに、本当に見事に立ち向かう瞬間があります。そんなとき、僕は心底うれしいのです。君たちは無力ではない、そう思います。」 [田中Y2009：94]

「今日もまた、担任の先生に毅然と向き合い、『僕のことを、どんなふうと考えてくれていたのですか』と尋ねた少年の隣に私は座っています。不登校が続き、学校からの連絡が途切れたとき、その子は、担任と話をしたいと言いました。この言葉を聞いて、僕は『君の勝ちだ』と思いました。『君の人生、君が勝ち取った』と、心から思いました。」 [田中Y2009：94]

「自分が自分として、自分の前に登場する、それは基本的には、ごく自然で当たり前のようなことなのでしょう。しかし、最近僕が会う方々の中に、そうした基本的なことを身につけることにつまずいた人たちがいます。僕は、そうした新米の方に、いつか自分の言葉で自分のことを語れるようになってほしいと思います。同時に、これまで生きてきた『自分』を慈しみ尊重し、消去することなく大切にしてほしいと思います。自分を見失うことなく、自分の世界を拡げてほしいと思います。今までの自分を否定せず、自分と生きてほしいのです。」 [田中Y2009：142]

田中先生の言葉の中で、私が大事だと思ったのは、「君たちは無力ではない」・「君の人生、君が勝ち取った」・「今までの自分を否定せず、自分と生きてほしいのです」というところである。これらを読んで、すぐに思い出したのは、J.L. ハーマンの『心的外傷と回復』である。『心的外傷と回復』は、聴きとられることの意味を考える上でのすでに古典に入るであろう名著である。

ハーマンによると、性的および家庭的暴力によって、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を受けると、その被害者は、「〈自分以外の人々との関係において形成され維持されている自己〉というものの構造を粉碎」[ハーマン 1999：75] されてしまうが、その被害者自身が、「安全」・「想起と服喪追悼」・「再結合」という、「回復の諸段階」を繰り返しおこなうことで、自分自身の「力と自己統御とを奪回」[ハーマン 1999：248] できるようになる、という。そして、ハーマンは、その被害者が、「私は私自身の持ち主だ。これは確かだ」・「自分になりたい人間になる」[ハーマン 1999：318] と思えるようになることが大切である、といっているのである。

田中先生の言葉とハーマンの言葉を重ねて考えると、自己が自己であるということは他の何よりも価値のあることなのではないか、と感じた。しかし、自己が自己であることの確認は、ひとりですることは難しい。自己は、どうしても他者から認められることを求めてしまう。他者からは、時として、自己を否定されることもある。そういうことを繰り返しながら、自己にとって意味ある他者に認められながら、自己という存在を自己が認める。そのことなしに、人間は、社会の中で生きていけないのである。だから、人間は人間として大事にされなければならない。私は、強くそう思う。もしかすると、いま、私が田中先生へこの文章を書いていること自体が、私が私であることを確認する作業なのかもしれない。

(2) 「聴く側」について

田中先生は、ある具体的な日常の出来事を通して、次のように語っている。

「僕の知らない歴史の中で、彼の生活がかりうじて護られている、ということそのときぼんやりと思いついたのです。治療とは、日常の社会的情勢と切り離せない、さまざまなファクターが絡んでいるんだと、思いました。」〔田中Y2009：4〕

「『僕の人生がどうかなんてより、大切なことは、君が今生きているということの大変さの一部を、今初めて僕が知ったということで……。それでもきつと、僕は君のことをまだちっとも知らないのだ……と思った』とだけ伝えました。」〔田中Y2009：89〕

「このできる範囲での協力を実践するためには、その方の人生をよく聴き取り、どういった経過で生き続けてきたかという、人生を知らねばなりません。」〔田中Y2009：7〕

「精神科の仕事をしていると、自分の考えが正しいのか、相談にみえる方の考えが正しいのか、よくわからなくなるときがあります。時々本当に自信がなくなることもあります。そんなことがあってもよいかもしれない、と時々思ったりしてしまうのです。『一度は信じてみるものだ』という言葉は、『鵜呑み』という表現よりも、心にびたっとくるなど、あらためて思っています。」〔田中Y2009：48〕

「臨床現場では『共感』ということばがよく使われます。事例検討会でも、あるいは多くの先輩からも『患者の話に共感的な態度で接する、共感的に話を聴く』ことが大切だと説かれました。……僕も、相手の感情状態には、できるだけ近づくことしかできないし、しかもどこかで自分にとって都合の良い近づき方をしているに違いないと感じます。自分に置き換えても、『絶対に解りっこない』という感情がどこかにありながら人に話をしているのではないだろうか、と思うのです。」〔田中Y2009：102-103〕

ここでの田中先生の文章は、聴く側の姿勢と方法を言っているように思う。聴く側の姿勢と方法については、アイデンティティという言葉をつくりだしたことで有名な E.H. エリクソンの『老年期』〔エリクソンほか 1997〕などの古典を思い浮かべると、ここでは、最近お話をうかがった、高校の地理・歴史科、公民科の先生である川原茂雄さんの「聴く」ということを軸とした教育実践について書きたいと思う。

川原さんは、これまで、特に、生活指導に興味・関心をもってきたが、あるきっかけから大学院で臨床教育学の学習・研究をする中で、人間にとって自分自身の声を「聴きとられる」ということは重要であるということに気がつき、これまでの自らの教育実践を振り返る中で、授業は生徒との関係において重要であり、授業は教える場ではなく、生徒の声を聴きとる場である、と考え方を変えていったのである。例えば、川原さんは、倫理の授業で、生徒に自由課題研究という小論文を書くとりくみをおこなっているが、生徒が自由課題研究のテーマ設定をするにあたって、生徒と対話を繰り返すのである。ここでいう対話とは、単なる言葉の関係ではなく、「聴きあう関係」のことである。川原さんは、自らの主体をかけて、生徒に自らの言葉で語りかけ、聴きとる。生徒も、自らの主体をかけて、川原さんの言葉を聴き、自らの言葉で語る。その時、その生徒にとって意味ある自由課題研究のテーマが設定され、作品がつくりあげられていくのである。〔川原 2004〕川原さんのお話をうかがう中で、私は、いま、北海道の札幌で、このような教育実践がとりくまれていることはとても大事なことであり、「教育実践における『聴く』」ということの意義を、改めて、認識した。

医療という領域と教育という領域では、同じ「聴く」といっても、仕事の内容の違いから、

実際に聴く側の姿勢や方法が異なるところもあり、同列に論じることは難しい。それでもなお人間発達に関わる領域で「聴く側」に共通に求められるものがあるとするならば、それは、相手のことはわからないかもしれない、と思いながらも、なお、その気持ちに寄りそいながら、相手の声を深く聴く以外にないということ、そう感じたのである。

(3) 「相互理解」について

田中先生は、ある具体的な日常の出来事を通して、次のように語っている。

「僕たちが共に生きるためには、社会という場は必須であり、その社会を成立させるためには、他者と共に生きることが求められます。他者と共に生きるためには、僕と異なる価値観や社会観を持つ、あるいは育ちそのものも異なる他者と、円滑に円満に生き合うことが保証される必要があります。その前提条件は、……『相互理解』となります。」 [田中Y2009：60-61]

「共に生活する者として向き合うとき、相手の思いがわかりにくいということは、本来前提としてあるはずです。だから、語り合おうよ、言葉をぶつけようよ、と思うのです。『君に届かない僕の気持ち』が問題なのではなく、ただ『僕に届かない君の気持ち』にだけ課題がある、という理解は、すでに対等の相互理解を困難にさせてしまうものではないでしょうか。単純に、向き合ったあなたに、僕は『わからない』ということをして、困惑や不安を隠さずに、そしていつかわかり合うために伝えたいのです。」 [田中Y2009：65-66]

田中先生は、「聴く」ということについて、対等な関係の中でおこなわれる相互理解が何よりも重要である、と言い、そのこと自体が、「生きる」ことをつくりだす、としている。

田中先生は、ある具体的な日常の出来事を通して、次のように語っている。

「生きるということは、孤独な部分と、他者と不器用に重なり合う部分のバランスで成り立っているのかもしれませんが。それぞれが主体である己と関わり合うなかで、学び合い、育ち合い、折り合いをつけつつ存在し続けることが“生きる”ということにつながるのではないのでしょうか。」 [田中Y2009：11]

「共に生きるということは、ある意味、避けようとするだけでなく、じゃ、一緒に、という動きに変化することでもあるのかもしれませんが。」 [田中Y2009：110]

「一緒にいる、ということは、一緒にいよう！ とか、一緒にあるべきだ、とか、別々ではいけない、といったものではなく、特に気負うことでもなく、日々淡々と、粛々と、しかし、ささやかながらもキラキラと優しく光り輝く瞬間を共有する刻のためにあるのだらうな、と思います。」 [田中Y2009：113-114]

生きるということ、それは人間にとって当たり前のようなことだけれども、奥が深い。田中先生は、「生きる」を「共に生きる」とさらに表現しなおしている。田中先生の「生きる」ということへのこだわりを感じてしまう。

私は、大学生の頃から、「子どもの権利」に興味・関心をもっているが、「子どもの権利とは何か」ということを考える際、「人が人間としての尊厳を確保し、人間関係（居場所）を形成し、自らの人生を主体的に生きる（成長発達・自己実現する）ためのあたらしい人権＝人間関係を形成する権利としての意見表明権」 [福田 2002：12] という定義を思い浮かべる

ことが多い。田中先生の言われる「聴く」ということは、子どもの権利論でいうところの意見表明権そのものなのだと思う。いや、田中先生は、意見表明権の内容をすでにとりこんでいて、そのとりくみを私が、意見表明権と呼んでいるだけなのかもしれない。

（４）「臨床の思想」について

このように考えてくると、「聴く」ということは、「聴きとられる側」と「聴く側」が主体的な相互理解をおこなう関係を重視する必要がある、特に、「感じる」こととセットでなければならないのではないだろうか。それこそが、田中先生が定義づけする、「聴く」ということであり、「臨床の思想」なのだろう。

「人生における、答えのない課題を僕は今も抱えています。自分の哀しみを、自分で片づけることができなくても、それはいけないことでも、はずかしいことでもない、ましてや、弱い自分のせいではない、と僕は声を大にして言いたいと思います。大切なことは、その人が、本当のことを言ってくれる一瞬を、哀しみを語ろうとした一瞬を、待っているよという構え、アンテナ感覚なのだろうな……と、精神科医として思います。」 [田中Y2009：56]

「ですから、わからなくても当たり前です。ちっとも恥ずかしいことではないと思います。僕は、『ごめんね。わからない』と答えることが少なくありません。悔しいけれど、本当にわからないことがあります。でも逆に、その子が今どんな気持ちなのかについて、わかりたいとは願っています。楽しい気分なのか、悲しい思いがあるのか、その子の言動を見ながら、昔の無声映画のように、たくさんのナレーションを、僕は、心のなかで唱えています。」 [田中Y2009：215]

このような、臨床の思想は、臨床諸科学のテキストには書かれていない。臨床活動では当然なのだろうが、理論通りに現実には動いていない。日々、子どもたちの人間形成の危機は深まっており、それに対応する臨床も変わっていかなければならない。だから、「聴く」ということは、人間がともに生きていくために、必要不可欠なのである。このことを、田中先生は、おそらく、学校の先生を「あなた」と考えて、日常の教育実践を励ますメッセージとして贈っているのではないだろうか。私は、「聴き続けることから生まれる希望」を読んで、そう感じたのである。

2. 「連携」ということ

もう一つ、目にとまったのが、「誰のための連携なのか」という章である。この「誰のための連携なのか」ということ、この問いは、田中先生が生きてきた中で関わった人たちとの間で生まれてきた問いである。

その問いが生まれた一つのきっかけは、長期研修先の病院での先輩の医師であった所長と指導医からの言葉である。

「先輩の医師であった所長が……『田中くん、医者といっても困るときはあるよね。今回もおそらくこれからも、君一人ではなにもできないときがある。その困ったときに力になってくれる人をどれほど持っているか、作れるか、それも臨床力だよ。ネットワークを作りなさいね』と助言してくださいました。」 [田中Y2009：14]

「研修先の病院で僕の患者の転院を勧めた指導医は、連携の大切さのほかに『医者はフットワークだよ』ということも教えてくれました。」 [田中Y2009：16]

もう一つは、発達障害のある子どもとその親を、専門家がつながって、支え合うための会の趣意書である、「願い」という文章である。(連携については、田中先生がこの会に関わる中で書いた著書の中にも書かれている。[田中Y 2001：98-168])

「連携とは、関係者が互いに支え合いながら、ひとつになって子ども理解を進めることです。これから私たちは大きな輪を作り、このような問題を持った子どもたちの名誉回復を図り、可能な限りの対応システムを作らなければなりません。こうした真剣な議論は、ADHDやLDの理解・対応の前進だけではなく、今の教育、福祉、医療、そして社会が抱える問題への切り口にもなっていくかもしれません。子どもたちが生き生きとした人生を送れるよう、夢を持って育っていけるよう、環境を保障すること。これはわれわれの責任であり、願いでもあります。子どもたちが『生まれてきてよかった』と思い、家族が『この子を授かってよかった』と思い、周りの人々が『この子に出会えてよかった』と思えるような社会を築きたいと思えます。趣旨に賛同される方々の参加を募ります。手をつなぎましょう。」 [田中Y2009：20-21]

このようなきっかけから、連携について、田中先生は、「連携とは、孤立から抜け出して、手をつなぎ合い、支え合うことです。そしてその最終目的は、当事者の益になるということです。したがって連携とは、ある目的を持った機能ということになります」 [田中Y 2009：22-23] と述べている。このことを学問的に定義すると、「連携とは、複数の者（機関）が、対等な立場に位置した上で、同じ目的を持ち、連絡をとりながら、協力し合い、それぞれの者（機関の専門性）の役割を遂行すること」 [田中Y 2009：23] ということになる。田中先生は、その上で、連携がよりよき動きになるために、「①まずなによりも互いの専門性を尊重し、役割分担を明確にする必要があること」・「②異職種の間が常に共通言語で話ができないといけない」・「③異職種の人と出会うとき、職種を越えた大変さを互いに慰労する必要がある」 [田中Y 2009:23-24] ということを強調している。精神科医の斎藤学先生は、「ネットワークという言葉は誤解されやすいですね。機関が相互に手を組めば、それでネットワークができたと思っちゃうところがあるんです。そうじゃなくて、“ネットワーク能力”とか“ネットワーク障害”という言葉があるのですが、それは個人に属しているものなんです。つまり、ネットワーク・セッションとか、ネットワーク・セラピーという時は、個人の持っているネットワーク能力をどういうふうに伸ばしていくかという話なわけです。援助する側にネットワーク能力がないと、ケースを抱え込まずるを得なくなってくるわけです。熱心であればあるほど、だんだん、抱え込んでしまう。抱え込んでちゃダメです。自分でできないと思ったら、『できないよ』っていうSOSを発信する。そのうちに、援助の網の目ができてくる。私は無力であると言いつけるということが必要なんです」 [斎藤 1992：306-307] というように、連携とネットワークという用語こそ違うものの、田中先生と同様

のことを指摘している。このように、生きることに困難を抱えている当事者を支えるために、専門家と専門家、当事者と専門家が「連携」ということは、いま、取り組むべき課題なのである。

その上で、さらに、田中先生の考える「連携」を、「孤立」・「支え合う」・「当事者」ということから考えてみたいと思う。

（1）「孤立」について

田中先生は、友人との日常の出来事から次のように語っている。

「友人は、『なによりも大きな課題なのは、当事者と関係者の孤立であり、連携の目的は孤立からの脱却である』と話してくれたことがあります。まさに、親と関係者たちは重なり合うことなく、時に孤立に気づかずに孤立しているといえるかもしれません。」 [田中Y2009：22]

また、タクシーに乗車するという日常の出来事から次のように語っている。

「僕は、タクシーに乗り、運転手さんの話を聴くたびに、『人は孤独のなかでは生きていけないのだろうな』と思います。見ず知らずの間柄でも、共にいることの他愛もない、しかしほのほのとした暖かさを、僕は、ちょっとだけ嬉しく思うのです。」 [田中Y2009：152]

田中先生は、「孤独」について、多くを語っていないが、私には分かるような気がする。

私は、東京にいた頃、非行少年・少女を抱える母親や父親たちの自助グループである、『「非行」と向き合う親たちの会』で聴きとりをおこなっていた。私は、この会の例会で語られる母親や父親の苦悩を聴いていて、子どもと親が格闘しているその場面を想像するだけでも、心が痛んだ。私にできることは、ただ聴き続けることしかなかった。それぞれの親が向き合っている事柄は多種多様であるが、それでも共通していることは、自分自身のことではないのにも関わらず、我が子が非行少年・少女であることを家族や地域の人たちから責められることで孤立している、そのこと自身がつらい、ということである。親は、例会で、自らが体験したことを繰り返し語り、同じような状況にある同じ親たちに共感してもらうことで、生命をつないでいるのである。ある意味で、親たちは、月1回の例会があり、そこで語ることで、人生のすべてをかけて、生きているのである。[能重ほか2004]

田中先生は、孤独を知っている。おそらく、私が聴き続けて感じたことと同じような想いをもっている。孤独は耐え難い感情であり、田中先生の言われるように、当事者が孤立に気づかずに孤立していることさえあるが、だからこそ、当事者にとって孤立ではない状態をつくるために、田中先生の考える連携が大事なのである。

(2) 「支え合う」について

田中先生は、アルコール依存症と診断された男性との日常の出来事から次のように語っている。

「支援というものは、一人ひとりに添ったものでなくてはいけない、それはひとつではない。支援者は多くの選択肢を準備できたらいのかもしれない、これがそのときのささやかな学びでした。」〔田中 Y2009：8〕

また、学校で化学薬品を服用しようとして入院した高校生との日常の出来事から次のように語っている。

「あのとき彼は、なにかしら気持ちが切り替わり退院を決意し、一方、僕も、それまで人知れず苦しんでいた問題から解放されたのです。支援とは明らかに、相互作用、相互関係であると実感したエピソードです。」〔田中 Y2009：10〕

「支え合う」ことの重要性は、私自身、臨床心理学の古典である S.J. コーチンの『現代臨床心理学』〔コーチン 1980〕を読んで理論的に確認したり、『『非行』と向き合う親たちの会』でも現実を通して理解してきたつもりであるが、ここでは、私が私自身と向き合う必要があるということについて強い影響を受けた、東京の麻布にある「家族機能研究所（IFF）」でおこなわれている「斎藤学オープンカウンセリング」で学んだことを書きたいと思う。

私は妻に連れられてオープンカウンセリングに何度か足を運んだことがあるのだが、そこでは、精神科医の斎藤学先生と相談者と聴講者がいて、公開でカウンセリングがおこなわれている。斎藤先生は、相談者にカウンセリングをしながらも、聴講者に対してもしろいろなことを語りかけるのだが、私の中でとても印象的だったのは、相談者が、斎藤先生が理事長をしている「さいとうクリニック」で診察を受けたり、IFFでカウンセリングを受けることは大切なことなのだが、それではお金や時間がかかり、相談者の力になりきれないので、斎藤先生が理事長をしているボランティアのNPOである「日本トラウマ・サバイバーズ・ユニオン（JUST）」という自助グループや、相談者が住んでいる地域の保健所とつながることで、日常的に相談者自身を支えてくれる人たちと関係をつくるのが大切である、という趣旨のことを、斎藤先生が何度も話していたことである。〔斎藤 1989〕それまでの私は、カウンセラーや弁護士などが、相談者にそれぞれ個別にどのように対応するか、が大事だと考えていたが、斎藤先生の話聴いて、まずは、相談者自身がどうしたいか、次に、相談者が、自分自身からどのようにして専門家がつくっている支え合うネットワークにつながっていくか、ということがとても大事なのだと感じた。その頃から、私は、「援助」という言葉を意識的に意味をもたせて使うようになったのである。（ただし、斎藤先生のネットワークと、田中先生の支え合うは、当事者と専門家の関係の位置づけについて、ズレがあるように思うが、そのことは、ここではひとまず深入りはしない。）

人間発達を援助する専門家というのは、お節介な仕事のように思える。確かに、支援とは、生きることに困難を抱えている人から助けを求められた時に、その人の人生に介入するのであり、ある意味で、その人の人生を方向づけてしまう行為でもあり、また、その人の自立

を奪いかねない。にも関わらず、「支え合う」ことは、いま、求められている〔西平 1993：272-273〕。田中先生の考える連携は、連携することが重要なのではなく、何よりもともに生きることが重要なのであり、生きることを支え合うために連携が必要なのである。

（3）「当事者」について

田中先生は、幼稚園に通っているある男の子に関わる日常の出来事から次のように語っている。

「『みんな、診断名に惑わされているんだよ。ちゃんとその子を見れば、どうしてほしいかわかるはずさ』と、さらりと、本当にさらりと話しました。『誰だって、冷たいお弁当よりも温かいほうがおいしいに決まっているよ。その当たり前の感覚や気づきを、診断後には、失いやすいんだよね』友人の言葉に僕は『まいった～』と苦笑しかできませんでした。でも、このエピソードはとても納得のできるもので、僕の今までの医療行為を見つめ直すきっかけになりました。」〔田中Y2009：182〕

田中先生の文章を読むと、「当事者性」とは、その人の立場になって考える、ということではなく、その人がどうしたいのかという意向を尊重する、ということなのであろう。その意味で、当事者が存在するというを、専門家が自覚することなしに連携はあり得ない。

先ほどの、「人間関係を形成する権利としての意見表明権」という子どもの権利の観点からいえば、子どもは、「これがあなたのためよ」という、おとなからの子どもに対する愛情という名の暴力を拒否して、「あなたはあなたらしく生きていいんだよ」ということを、その子ども自身の権利として意味ある他者から承認してもらうことで、自らが生きるための力を我がものとするのである。田中先生の考える「連携」ということは、子どもの権利論でいうところの意見表明権を行使するためのつながりを保障することなのだと思う。いや、これもまた、田中先生は、意見表明権の保障の内容をすでにとりこんでいて、そのことを私が、そう呼んでいるだけなのかもしれない。

（4）「システムの思想」について

このように考えてくると、「連携」ということは、「聴く」ということを当然の前提とした上で、当事者の意向を中心にして、専門家同士が支え合う関係をつくり、当事者と専門家が支え合う、そうすることで、社会の中で当事者が生きていく、ということになるのではないだろうか。それが、田中先生が定義づけする、「連携」ということであり、「システムの思想」なのだろう。

「連携のシステムが立ち上がるときは、諦めずに求め続ける人の存在から始まると思っています。『気づいてしまった』人が、システムの旗手となる、これはプロフェッショナルの立場です。このプロフェッショナルの立場から始まったシステムを、一方で、継続する必要があります。そこに組織論が必

要となり、その組織を支えるのが、知識や技術の専門分化を営むスペシャリストとしての力量になるわけです。連携をシステムとして確立していくために大切なことは、継続するための相互の支え合いであり、言葉を換えると、スペシャリスト同士の尊重になります。しかし、連携でつながる仲間は、それぞれの差異性からなる集団であることも理解しておかねばなりません。個としてのスペシャリスト、『意志』としてのプロフェッショナルとしても、やはりそこには差異が明確にあるわけです。新しい（共に立つ）地平線は、当初ある意志のもとに集まったプロフェッショナルにより形成されますが、意志あるいは託宣は、個々によって微妙な異なりを持ちます。」〔田中Y2009：24-25〕

連携とは、個人の努力によってはじまるが、それだけでは続かない。続かなければ、生きることには困難を抱えている人を支えることはできない。しかし、人間が生きることさしおいて、教育や福祉などの行政や制度をつくれればよい訳ではない。「僕の営む連携は、生きるということにはしよせん根本的に無力であっても、ささやかながらも役立つ存在を支え合う役割くらいは持ちたいのです。もしかしたら、無くてもよいくらいの、（ささやかな）役割であってもよいのです」〔田中Y 2009：27〕というように、人間がともに生きるためにこそ、システムとしての連携が必要なのである。このことを、田中先生は、おそらく、臨床家を「あなた」と考えて、日常の臨床活動を励ますメッセージとして贈っているのではないだろうか。私は、「誰のための連携なのか」を読んで、そう感じたのである。

おわりに一再び、雪が降る空の真下で「私」から「あなた」へ

思い余って、いろいろと書きすぎてしまった。

ここまできたので、私が重要だと感じたことを、もう一つだけ、書いておきたいと思う。

それは、田中先生の著書が、「僕」にこだわっていることである。田中先生が「僕」にこだわっていることについては、「連載を読まれていた方は、お気づきかと思いますが、回の始めのころは、『私は』という表記で綴っていた文章が、徐々に『僕』と表現されるようになり、ずいぶんと力の抜けた文章になっていきます」〔田中Y 2009: xi〕と書かれており、「僕」は、全編を通して登場し、その時々感じたこと、例えば、怒り、喜び、悩み、などを綴り、泣くこと、生き続けること、などの希望を語っている。

「それでも、次第に僕が『僕』と距離を置くことができるようになったのは、おそらく仲間の存在があったからかもしれません。それまでひとりで生きていたと思っていた僕は、ひとりじゃないとわかり始めると、安心して『僕』を仕事に連れ出さないですむようになりました。いつも『僕』をどこかで気にしていた僕が、『僕』を気にしないで、『あなた』へ向き合えるようになったころ、僕は、なんとなく精神科医から卒業できて、児童精神科医へとなっていました。」〔田中Y2009：220〕

「ひとりでいたとき、僕は、ひとりでいたかったから、そしてひとりでいるしかないと思っていたから、僕は、ひとりでいたのです。『あなた』に向き合えるようになって、僕は、ひとりだけれど、ひとりじゃないと思えるようになり、たくさんの『あなた』に支えられ、『あなた』の未来に思いを馳せるこ

とができるようになってきました。」 [田中Y2009：222]

「本当は『連携』について書きたかったのです。しかし、そのまえに、『つながり合うこと』を求め、『混じり合いながらの一緒』に関わっているのかを開示しないと、格好つけた嘘っぽいシステム論になりそうな気がしていたのです。僕は僕の弱さを自覚し、伝え、そのうえで、『支え合う』連携をつくり出したいという僕の思いを明らかにしたかったのかもしれませんが。あるいはこの原稿を通して、自分をどこか隠し続けたことに、すこしは罪悪感があったせいかもしれません。」 [田中Y2009：222-223]

このような、「僕」・「あなた」・「連携」をつなげてみると、臨床という仕事は、共に生きるため、支え合うためにおこなわれることなのだから、他人事ではなくて、人格と人格を直接的に取り結ばなければならず、その意味で、他者を通しての自己が登場しなければならないし、聴きとられる側・聴く側の両者に、自己理解が求められている、といえるのである。そう考えると、田中先生の考える、「聴く」と「連携」を、私自身が真の意味で大事だと感じたならば、これまで私は、「田中先生」と呼んできたが、支え合う主体的な相互理解をおこなう関係をつくるためにも、「田中さん」と呼ぶことにしたいし、そうすることで、私自身が孤立しないで、田中さんにとっての本当の「あなた」になれるのかもしれないし、そして、当事者としての本当の「私」になれるのかもしれない。

このような自己にこだわるということは、現代の教育学構想である、臨床教育学においても、当事者性を重視する「子ども理解」[田中T 2009]という仕方で展開されているし、教育人間学においても、「究極的には一人称的に説明できなければ誰もが納得しない人間形成論」[汐見 1999：259]という仕方で展開されている。このようなスタイルの教育学、その中軸となる子どもの権利論は、いままさに探求されなければならないものなのではないだろうか。

そして、私が書いているこの文章の意味、それは、教育学と精神医学を子どもの権利の観点から架橋することで、現代社会における子どものあり様を問いなおし、私自身の日常生活を問い直していく、という作業でもあるのである。

つまり、臨床家でもなく、教育実践家でもない、教育学研究者である私に何ができるのか、ということが、いま、学校現場の先生から問われているのである。私にできること、それは、連携できるような専門家や実践をたくさん発見し、いろいろな方法でその取り組みの大事さを発信していくこと、そして、子どもや親、教師たちの声を聴いて、生きることに困難を抱えている人がいれば、連携を紹介して、ともに生きていくこと、というようなことではないだろうか。

結局のところ、田中さんは、教師に対しては、「聴く」ことの重要性をいい、臨床家に対しては、「連携」の重要性をいい、両者に対して、そのための自己理解を求めている。それは、「共に生きる」ために、「人間の尊厳」のために、である。これが、田中さんの著書に自己一身上の問題としてつらぬかれている、「臨床とシステムの思想」であり、教育学と精神医学の架橋となるのであろう。

子どもの権利という観点、これは、私の興味・関心にひきつけているところもあるが、田中さんも、その視点をもっている。「教育と児童精神医学には、対象となる子どもの成長と変容に希望を持ち続けるという共通点があるようだ。期待ではなく、希望。それは『子どもが子どもらしく生きる権利の創造と工夫』への参加のなかにこそ、ある」[田中Y 2008：

274] というように。子どもの権利は、人間の尊厳を権利化したものであるが、子どもの権利こそ私たちの希望なのであり、教育学と精神医学を架橋する「臨床とシステムの思想」を支えるものなのであろう。

このような田中さんの臨床とシステムの思想につらぬかれた著作は、田中さんのこれまでのお仕事である、『ADHDの明日に向かって』[田中Y 2001]や『軽度発達障害』[田中Y 2008]とあわせて読むことで、さらにいろいろな事柄がみえてきて、重層的なひろがりを経験することができそうであるが、これは、次の機会にしたいと思う。

こんな私の文章を田中さんはどう読まれるのだろうか。恥ずかしい気もするが、「雪が降る空の真下で『私』から『あなた』へ」贈りたいと思う。

文献一覧（宮盛）

- E.H.エリクソン, J.M.エリクソン, H.Q.キヴニク（朝長正徳・朝長梨枝子訳）1997『老年期 生き生きしたかかわりあい』みすず書房
- J.L.ハーマン（中井久夫訳）1999『心的外傷と回復〈増補版〉』みすず書房
- 福田雅章2002『日本の社会文化構造と人権 “仕組まれた自由”のなかでの安楽死・死刑・受刑者・少年法・オウム・子ども問題』明石書店
- 川原茂雄2004「響きあう『学び』をつくる授業—高校『倫理』での『自由課題研究発表』のとりくみ—」教育科学研究会編集『教育 4月号』国土社
- S.J.コーチン（村瀬孝雄監訳）1980『現代臨床心理学—クリニックとコミュニティにおける介入の原理』弘文堂
- 宮盛邦友2007「教育における〈政策と運動〉論の再構築—子どもの権利条約第44条【締約国の報告義務】および第45条【委員会の作業方法】に基づく日本政府と市民・NGO間の〈社会的対話〉を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要 第46号』
- 西平直1993『エリクソンの人間学』東京大学出版会
- 能重真作・浅川道雄・春野すみれ2004『いつか雨はあがるから 支えあう「非行」と向き合う親たちの中で』かもがわ出版
- 斎藤学1989「アルコール家族と共依存—システムズ・アプローチの視点から」斎藤学・高木敏・小阪憲司編『アルコール依存症の最新治療』金剛出版
- 斎藤学1992『子供の愛し方がわからない親たち—児童虐待, 何が起きているか, どうすべきか』講談社
- 汐見稔幸1999「ニヒリズムからの脱却の試みと堀尾教育人間学—学的意識の形成期に焦点をあわせて」皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部
- 田中孝彦2009『子ども理解—臨床教育学の試み』岩波書店
- 田中康雄2001『ADHDの明日に向かって 認めあい・支えあい・赦しあうネットワークをめざして』星和書店
- 田中康雄2007「児童青年精神医学が扱う疾患・生涯について」太田政男・小島喜孝・中川明・横湯園子編著『思春期・青年期サポートガイド』新科学出版社
- 田中康雄2008『軽度発達障害 繋がりがあって生きる』金剛出版
- 田中康雄2009『支援から共生への道—発達障害の臨床から日常の連携へ』慶應義塾大学出版会
- 横湯園子2002『教育臨床心理学:愛・いやし・人権 そして回復』東京大学出版会

Ⅱ. 僕が語ろうとした事柄、気がつかなかった事柄 ——「語るあなた」へ「語り返す僕」——

田 中 康 雄

1. 「対話」はすでに始まっていた

このたび宮盛先生から、「支援から共生への道 発達障害の臨床から日常の連携へ」（以下拙著）を題材にしての対話をご提案いただいた。僕は自分が関わった書誌について宣伝的になるようなことはこれまで避けてきたし、今後も行わないだろうと思う。しかし、今回の宮盛先生からの申し出は、決して販売促進につながるようなことではなく、それぞれの学問的・経験的背景をもとにしての対話である。その意味で題材に選んでいただけたということに素直に喜び、同時に申し出をお引き受けすることは、執筆者としての責任を果たすという意味からも避けることはできないと思った。さらに、拙著に関心を持ってくださったという方が、どのような感想を表出されるのか、ということに、僕もまた強く関心を持ったため、この「対話」を引き受けることにした。

宮盛先生は、あのとき討論ではなく対話を望んだ。対話とは、ある一方がある目的をもって始めた会話に、もう一方はある程度「不意」にその会話を受け取り、いきなり向き合うことから形成される。即時性と応答性が期待される点で、互いに特定のかつ共有するテーマに対する意見を述べあう討論とは異なるものと捉えることができよう。

宮盛先生が不意に僕の部屋を訪れ、この申し出をされた時点で、すでに会話は始められた。つまり僕の部屋を僕にとっては不意に、宮盛先生にとっては、予定通りに（しかもおそらく何度か）足を運び語り始め、即時的に僕が引き受けたことで、「対話」は始まっていたのだ。

2. この本を巡って

拙著は、僕の3冊目の単著であり、唯一のエッセイ集である。もともと文才がないのに、慶應義塾出版会の西岡編集者に上手にそそのかされて連載を引き受け、その後の2年間、本当に後悔をしながら書き綴ったものである。

読まれていない方のために目次構成を紹介しておく。児童精神科医の大先輩である九州の村田豊久先生に序文を書いていただき、宮盛先生が最初に引用された箇所がある前口上を述べている。そのあと、24の章立てのなかに、僕がこれまでの臨床や日常生活から気づいた事柄、考え悩んだことなどを思いつくままに書き記した。読まれる方のほとんどが、教育と臨床の現場で考え悩む実践家であるので、地を這うような話をもとに「一緒」に考え悩むようなことを書きたい、なら自分の悩みや考えを出来るだけ誠実に正直に綴ることであろうと判断した。ゆえに、先日も友人から「ここまで書かなくとも」というコメントをいただき、相変わらず加減のわからないやつだと思われるかと自負した次第でもある。

そんな赤裸々な話なので、これも児童精神科医の大御所の一人でもある小倉清先生から、「精神科医が自らの成長の道をありのままに描き出したという意味ではごくまれな本だと思

いました」と手紙をいただき、「まるで幼子が段々と様々なことの経験を通して年齢を重ねて成長していくように、徐々に臨床への道を一步一步たどってゆく、その筋道が実に刻明に示されているように思われました」と評価していただいた。

実際に24の章の中味は、虐待、自殺、睡眠障害、不登校、アルコール依存症、統合失調症といった臨床的状态を呈している子どもたちや成人の方達との出会いと別れ、そのなかには自殺により別れざるをえなかった方々も含め記し、そのうえで僕が日々感じている支援について、連携について、そして臨床的態度やその功罪についてなどを思いつくままに書き、最後に後書きとして納め口上を記した。

締め切り間際に呻吟し書いては後悔の日々が過ぎ、こうして1冊の本になったとき、僕はあらためて「生かされている」という、見えない、また必然のような偶然に、支えられているということに気づかされた。僕はなにをしてきて、これからどうしたいのかを、だらだらと洩らした言葉のなかから、僕は「僕」に出会うことができた。だから、この本は、たぶん僕にとって書く必要があった本だったのだと、思う。そして本書は、僕の書誌のなかで、意外なほどにもっともたくさんの多岐にわたる感想を寄せていただけたものになった。

3. 宮盛先生との本論での対話

拙著は、これまで、同僚や同業者、あるいは会ったことのないご家族の方達からお手紙や御意見をいただき、それぞれから思いもよらない、気づけなかった御指摘の事柄に、僕は驚き感謝し続けている。今回は、宮盛先生が関心をもってくださった。その書かれた言葉に向き合い、対話してみることにする。

宮盛先生は、「教育学と精神医学の架橋」と題して、特に拙著から「聴く」と「連携」という2つのキーワードを抽出した。そしてこの2つを、自らの研究テーマでもある子どもの権利という観点から論じている。

1) 「聴く」ということについて

宮盛先生は、「聴き続けることから生まれる希望」[田中Y 2009a: 96-104]という章を取り出し検討している。そのなかで「聴く」という行為は「聞きとられる側」と「聴く側」から成り立つ、と提案し、僕が「聞きとられる側」と「聴く側」が主体的な「相互理解」を行う関係を「聴く」と定義づけたと考察した。確かに宮盛先生がご指摘されたように、僕は、「聴く」ということについて、対等な関係の中でおこなわれる相互理解が何よりも重要である、と思っている。と同時に、対等な関係は、とても作り出しにくい、保証されにくい、ということも痛感している。だからこそ聴くことと語ることを、大切にしたいと思っている。それは宮盛先生も引用された「共に生活する者として向き合うとき、相手の思いがわかりにくいということは、本来前提としてあるはずです。だから、語り合おうよ、言葉をぶつけようよ、と思う」[田中Y 2009a: 65-66]という僕の言葉につながる。

あらためて宮盛先生のご指摘から、僕は、聞き続けるためには、語る他者の存在が必要不可欠で、実はそもそも語るというときには、わずかな、あるいは全くの絶望のなかであって

も、ある一条の明かりのような一点が語る側になればならないはずだということに気がついた。だから、虐待を受けたAくんが「大泣き」したときに、孤立して生きてきたAくんが光のない孤独からほんのすこし明かりが見え始めたと感じたのだ [田中Y 2009a: 76]。

すると「先生にいても仕方ないよ」、「言ってもなにも変わらないでしょ」と語った子どもたちの声が次々に浮かび上がってきた。

以前に、希望をもって合格した高校に失望した子のご両親からの相談を受けたとき、「うちの息子が悩んだとき、心療内科に連れて行きました。そこでいろいろ相談したのですが、本人の意図とは異なったようで、帰り道『話しても無駄だった』といました。だから今日も別の相談室だけ行くかい？」と尋ねましたが『無駄だから』と部屋から出てきませんでした」と語った母親の言葉を思い出した。

ここには、語る側の小さな希望の灯火を、聴く側の姿勢が消してしまったことが示されている。もちろん臨床家としては本意ではなく、うまく出会えなかったということになる。しかし、小さな希望の明かりを持って訪れる側に「今度は」はない。

聴き続けることから生まれる希望とは、半身で虚心に聴き続け、「もう半身で希望の光と一緒に探し当てることが必要」[田中Y 2009a: 104]だと強調している。語る相手への真摯な態度は当然である。それでも相互に理解しあうことが困難でもあることを、僕は知っている。僕も「あなたに話してもだめだった」ということで心の扉を閉められた経験をたくさん持ってきたはずだ。ただ残念なことに、扉を閉めた方は二度と来られないので、希望を失わせてしまったという事実は、次に出会う臨床家が思い知るほかない。そして僕は、セカンドオピニオンとしてその経験も沢山してきた。ということは、僕の失敗をどこかでだれかが聞いてくれていることが沢山あるということも、また学ぶ。

そうした学びのなかで、僕は、語る側に対して、いかに安心してもらいたいからといって「わかったふり」をしないようにと、ある時から心がけた。それは宮盛先生も引用してくれた『君に届かない僕の気持ち』が問題なのではなく、ただ『僕に届かない君の気持ち』にだけ課題がある、という理解は、すでに対等の相互理解を困難にさせてしまうものではないでしょうか。単純に、向き合ったあなたに、僕は『わからない』ということ、困惑や不安を隠さずに、そしていつかわかり合うために伝えたい [田中Y 2009a: 65-66] という部分でもある。だから、一緒に探し当てるため、「本当のことを言ってくれる一瞬を、哀しみを語ろうとした一瞬を、待っているよという構え」を持ち続けたい、あるいはその感度を劣化させたくないと思う。

この「探し当てる」という表記は「子どもというのは、生まれながらにしてかけがいのない宝をみんな持っているんです。(中略) そのしまい込んでいるものをいろいろに探り回り、掘り当てたらそれを掘り起こす」という林の教育の捉え方から引用している [林 1991: 8]

もうひとつの「一緒に」という表記は村瀬の述べる思春期の来談者の求める良い治療者像の4つの柱のひとつである機動性からの引用である [村瀬 1995: 16]。

つまり、僕の強調した「もう半身で希望の光と一緒に探し当てることが必要」[田中Y 2009a: 104]という姿勢には教育と心理臨床における「僕が大切にしている2つの事柄」を含ませていた。そして、林や村瀬の持つ力を持ちえない僕は、常に意識し続けるために感度を研ぎ澄ませる必要があったのだ。

では、この感度は、どうやって育み鍛えればよいのか、ということになるが、僕は、そこ

にも語る他者の力がある、と思っている。

先日、ある母親から「先生、忙しいのにごめんね。どうしても伝えたくて電話したの」と夜に携帯が鳴った。僕は送別会の最中であつたが、どうしたのかと尋ねると、高等養護学校を卒業してグループホームに入所した息子が、先日「僕はお母さんの子どもに生まれてよかったよ」と言ってくれたのだそう。ボランティアで福祉事業を手伝っている母親に対して、息子が出したほめ言葉に、母親は涙が止まらなかったという。「ごめんね、忙しいのはわかってはいたけど、どうしても先生に伝えたくて、いままで本当にありがとう」と母親は涙声で話してくれた。僕は、その子へよろしくと伝えてもらい、母親に僕もうれしいと伝えた。携帯を切ったあと、僕も不覚にも涙が出た。語る側から希望を頂けた瞬間である。

希望を幻想で終わらないためには、こうした事実の積み重ねが必須となる。そのためには、待ち続けることも求められる。焦るな、焦るなと僕は僕に語りかけ、できるだけ楽観的な顔をして、語る側に対峙する。それは、不確実なタイミングを計り続ける不安と責任感の絢い交ぜでもある。

経験した瞬間にその事が過去の経験へとなくなっていくにしても、わずかな光が存在し続ける限り、僕は絶望に至らずにすむ。消滅しないですんだ希望が、明日、世界が減びるとしても、リンゴの種を埋める力を生む。明日を信じることで、明日まで僕の感度は乾かずにすむ。

聴き続けることから生まれる希望については、以前僕と座談会をしてくださった村田先生は「ああ、そうだったなあ、そのために毎日臨床をやっているんだな」と思ったと述べ、黒木先生は「聴き続けることによって、必ず希望は生まれるんだという信念、それこそが専門性じゃないでしょうかね」と述べている [田中Yら 2010: 43]

2) 「連携」ということについて

宮盛先生は、拙著からもうひとつ「連携」をキーワードとして検討している。そしてその「連携」を、「孤立」、「支え合う」、「当事者」という3点から考察を試みた。

孤立については、僕自身の本当にパーソナルな問題であり、それは生きることへの僕のこだわりと宮盛先生が看破したことに疑いはない。さらに僕にとって連携と対極にある「支配」への考えとも重なっていることに気がついた。

これらについては、すでに「オレンジリボンネット」という虐待防止に関するホームページの「特集子ども時代の私」に、僕は「生きることへのこだわり、支配することへの嫌悪」というタイトルで寄稿している。虐待における臨床経験からの話は、拙著にも「虐待に対してなにができるか」という章で書いている。しかし、ホームページの文章は、僕自身が児童虐待臨床という世界に足を踏み入れることになった個人的事情について述べた短い原稿で、おそらくホームページ上の小さなコラムなので、人の目に触れることは少ないと思われる。以下にその一部を加筆修正して引用する。

前略

ひとつは、私と親との関わりからです。

私は未熟児で生まれ、一人っ子で育ちました。母が心臓の具合の悪い人で、妊娠に耐えられないという事情で、私は7ヶ月で2000グラム以下で帝王切開で生まれたと聞いています。その後この世に生まれることのなかった何人かのきょうだいの存在も聞きました。

私は、その意味で生き延びたものであり、運が良かったのでしょうか。もしかしたら、生きることも出来なかった可能性もあったわけです。今もそうですが、そのせいか私は生死に関する不安が過剰に強い人間です。加齢とともに弱くなってきましたが、死の恐怖に強く縛られています。

ある日、小学生の低学年だったでしょうか、自宅で私が洗面所に隠れ、むこうから歩いてきた母を驚かしたことがあります。子ども心からのたわいもない遊びでした。私の声に驚いた母は、真剣な表情で「おどろかさなさい！ 死んでしまうじゃない」と怒鳴り、そしてきびしく論じました。その日以来、私は母を殺してしまったかもしれない、という思いに悩みました。

二つめは、親になってわが子と向き合ったときのことです。息子がまだ2歳前後の幼い頃、うそをいったということで、私は息子を叱りました。彼は、弱々しく泣きながら謝りました。

このとき、私は息子を支配した、という万能感を感じ、とても恐ろしくなりました。支配感というのは、嗜癖だ、依存だ、パワーゲームだ、と直感した瞬間です。これは、一步誤ると足を踏み外し、抜けられなくなるくらい悪しき魅力にあふれていると思いました。急いで止めて、抜け出さないとはいけない、私は抜け出せるだろうか、とても不安になりました。

この二つの経験から、私は、虐待というのは、誰が誰を支配しようとする行為なのか、そして支配したいという欲望の起源はどこにあるのか、ということに関心が向くようになりました。この二つは、実は表裏一体の物語であろうと思うのです。

私は、それゆえか、手をつなぎ合う相手や機関との「連携」に心が引かれ、支配ではなく共生へ、束縛ではなく規約へというテーマに向かっているのだらうと思いはじめています。

すでに、この時点で（これは2006年頃に書いた）宮盛先生のご指摘と重なる部分が見え隠れしている。

その後に生じた、僕の大きな変化は、おそらく当事者との連携、あるいは「一緒」ではないかと考える。最近には主に親との相談や面接が多いため、特に、親の望みと当事者である子どもの望みは異なるという点に強く関心がある。子ども本人が多くを語らないときでも、親が一通り述べたあと、僕は「お母さんは、こういつているけれど、キミはどう思う」と尋ねることも少なくない。

親が語る相談内容は、親の必死のニーズである。それを無視してはいけなない。しかし、子どもが求める支援とは、必ずどこか異なる。当然であるが、親と子は一心同体ではない。先日、親だけが相談に見えたとき、相談カルテに「ここの氏名って、私が相談に来たのですから、私（母親）の名前でよいのですよね」と言われ、改めて気づかされたことでもあった。

僕は、誰の相談に向き合っているのか、そしてその相談は、結局どこに向かおうをしているのか、と考える。語るのは大人だとしても、支援をもし子どもが求めているとしたら、子どもに直に希望を問いただすことでニーズを明確にリセットしなければならない。つまり語る側への感度と、その背後に居る語らない（語れない）側への想像力を巡らすことが、聴く側に求められている。

宮盛先生は、「抱え込んでちゃダメです。自分でできないと思ったら、『できないよ』っていうSOSを発信する。そのうちに、援助の網の目ができてくる。私は無力であると言い続

けるということが必要なんです」という斎藤学の言を引いた。僕も、支援する側として出来ることと出来ないことを自覚することや、出来ない部分をだれにつなぐかということの大切さについて「困ったときに力になってくれる人をどれほど持っているか、作れるか、それも臨床力だよ。ネットワークを作りなさいね」という先輩医師の言葉を引用して強調した〔田中Y 2009：14〕。さらに「わからない」ということを専門家として口にするのを恥じていたころがあったが、「今は『わからないこともたくさんあるよ』と伝えることができ、だからこそ『一緒に考えていきましょうよ』という思いが持てる」というようになった〔田中Y 2009a：215〕。

おそらく、それは僕が出来ない時に、僕を支えてくれる人がいることを僕が体験し、僕のできることを出来ない誰かがいたときに、代わりに行うことが出来るようになったからでもある。当初援助の網の目としてネットワークを作ろうとしていたときは、漏れない網の目作りを目指した時期があったように思われる。しかし、どこまでいってもネットワークとは網の目ということで、必ず隙間からこぼれ落ちることも自覚せねばならなくなった。余計なことだと、当事者から言われることもあった。お節介も必要なときと勇み足になるときがあることを知った。だからこそ、必要な人が必要な時に、声に出せればよい、と思う。すると、当然当事者には語ってほしいし、語れない場合は、想像したいのだ。

発達障害について学ぼうとアメリカにいったとき、children first というポスターに目を奪われた。子どもが中心でないと話は進まないと思った。でも当時は、子どもを真ん中において、「なにが出来るか」と周囲が検討するというイメージだった。今は、その子どもたちからの声に応える形で一緒に手をつなぎたいと思っている。つまり、Working together という視点である。多分、そこが、宮盛先生が引用された齊藤先生と僕の差違かもしれない。

そしてそれは、すでに宮盛先生が指摘された、「孤独は耐え難い感情で」、「だからこそ、当事者にとって孤立ではない状態をつくるために」求められている連携である。

僕は、おそらくそれを「お互い様」にしたいのだろう。「認めあう」、「支えあう」、「救しあう」といった「しあう」関係を、僕はいつも求めているようだ。そのはてに、「繋がりあって生きる」という言葉を選択し、支援という行為すらも「共生」の中に組み入れようとしていることに、改めて気づかされる。それは、すでに宮盛先生が引用されてきた、拙著からのエピソードからも明らかである。

「僕の営む連携は、生きるということにはしよせん根本的に無力であっても、ささやかながらも役立つ存在を支え合う役割くらいは持ちたいのです。もしかしたら、無くてもよいくらいの、(ささやかな)役割であってもよいのです」〔田中Y 2009：27〕は、一端、客体化してみると、どうしたら目立たずに役立ち、遂行後いかにきれいにフェードアウトするか、までを望んでいる僕の真意でもある。

さらに僕は、山住とエンゲストロームら(2008)の提唱する、自由度を高め臨機応変に柔軟に活動の糸を結び合わせ、ほどこき、ふたたび結び合わせるというようなイメージからの「ノットワーキング(Knotworking)」という指摘を採用し援用する。支援は、まさに支援する人と、支援される人の二者関係ではなく、互いに支え合うという関係であるので、常にほどこかれ、また結ばれるといった支援は、支援する人と、支援される人の二者関係ではない。結び目は常にほどこかれ、また結ばれるといったその都度の関係こそが重要なのである。そしてその関係こそが人間発達の生成を意味し、それ自体が育ちの過程でもあると考える。〔田中Y 2009b：57-58〕。

3. 次なる対話へ向けて

日々他者に耳を傾ける臨床に身を置く「私」が、次第に「僕」と対話し続け、最後に希望と期待と幻想が緋い交ぜになりながら、ようやく「あなた」へとたどり着くことができたものが、結果的に拙著に表出されたのである。

宮盛先生は、そうした変化について、拙著で僕が「僕」にこだわっていることを指摘した。「私」でも「筆者」でも「著者」でもなく、他ならね「僕」にした理由は、引用して下さったとおりであるが、素直に自分を表現できる一人称が必要であったことが最大の理由であった。連載中は呻吟し、悩み、何度か全面改稿をしたこともある。苦労の連続であったが、個人的には、「納得」できたことしか書かずに済んだというか、「納得」できないことを書くことが出来なかったことにもなった。

最後に、宮盛先生ご自身でのテーマでもあり、拙著からも感じ取っていただいたという「教育学と精神医学を架橋する『臨床とシステムの思想』を支えるもの」というご指摘は、僕自身でいえば、道半ばといえよう。

しかし、そのご指摘には、これまで伏せてきた一部に今一度心を向けざるを得ない。というのも、僕が子どもの精神科医になったとき、おそらく10年以上も昔のことであるが、僕は「教育と精神医学の架け橋」（1989：星和書店）というタイトルに惹かれその本を購入した。しかし、その内容は精神分析学の領域から教育への領域への応用について書かれていたもので、僕の期待は見事に外れた。それでも、いつかこのタイトルのような仕事ができればという思いがあった。それは、当時不登校問題に力を注いでいたとき、これは、医療ではなく、社会学であり、教育学であるという思いを強くし、そこに医療が参入できるとしたら人間学的精神医学でしかないという思いを強くしたことがあったからである。

しかし、そのことは、これまで特に誰にも話したことはなく、僕の心に静かにしまわれていたはずであった。宮盛先生がこの言葉を用いたのは、まったくの偶然であることは間違いない。これが日常の会話であれば、「あっ、そうそう、そのこと、そのこと」と思わず身を乗り出し、「いや、僕の思い、パレパレですかね、痛いところ突いてきますね」といった感じの対話になったであろう。しかしそんな会話とて、知らない方からすれば、見たこともないマイナーな映画について、見たばかりの方と一発屋の監督がたった二人で語り合っているだけで、周囲には疎外感すらも漂わない、という会話にすぎない。

結局本論は、そのような展開になってしまっている。おそらく本論は、純粹に宮盛先生の論文箇所だけを読んでいただくほうがよい。

しかし僕は、書き手として気がつかないでいた点をご指摘していただき、さらに、僕自身も半歩考えを進めることができたところもあった。加えて、僕のどこかに留め置いていた昔の思いに光を当て、思い返させてくれたことにも感謝したい。

だから、ほんとうに対話は始まったばかりなのだ。

最後にいただいた宿題として「臨床とシステムの思想」について、出来る限り早い時期に、僕は考えを纏めねばなるまい。その点についても、「雪が降る空の真下」からの「あなた」へ、多少の愚痴とともに深謝したい。

ありがとうございました。

文献一覧（田中）

田中康雄2009a『支援から共生への道—発達障害の臨床から日常の連携へ』慶應義塾大学出版会

田中康雄2009b『紡いでゆく連携—ネットワーキングからノットワーキングへ』日本評論社

田中康雄，村田豊久，黒木俊秀2010：座談会 子どものこころの臨床について（3），教育と医学. 79. 42-51.

村瀬嘉代子1995『子どもと大人の心の架け橋 心理療法の原則と過程』金剛出版，

林竹二1991『決定版教育の根底にあるもの』径書房

オレンジリボンネット：<http://www.orangeribbon-net.org/index.html>

山住勝広，エンゲストローム編2008：ノットワーキング Knotworking 結び合う人間活動の創造へ.新曜社